

マタイ 6 章 5-15 節 「祈りに生きる」

本日の箇所には、「主の祈り」が記されています。主の祈りは、「こう祈りなさい(9 節)」と言って、主イエスご自身が教えてくださった祈りです。主の祈りは教会の最も大切な祈りの一つとして、この 2000 年間、祈られ続けてきました。今日は、祈りとは何かを、まず考えていきたいと思います。そして主イエス・キリストが主の祈りをお教えくださったことの意味を考えたいと思います。

祈りは、神さまとの親密な対話です。祈りとは、神さまに向けて心を開き、神の偉大さを認め、神を賛美し、そして御心を求める行為です。祈りはまた、神の御心を求める行為でもあります。祈りを通じて、私たちは神の御計画と御心を知り、従うことを誓います。祈りは、神の御心を押し付けるための手段ではなく、自分の心を神の御心に合わせるための時間です。でも、願いと祈りの違いは何でしょうか。大雑把に言えば、祈りの中に願いが含まれるでしょう。願いとは、私たちの必要や願望を、神に託す行為です。主の祈りの、「日ごとの食物を、きょうもお与えください」という部分は、私たちが生きるために必要な糧を、神に求める祈りです。祈りの中で願いをささげることは、私たちの信仰を具体的に示す機会でもあります。

「御心が行われますように」の「御心」とは、教会特有の言葉遣いの一つです。意味は、「神さまの心」、すなわち「神さまの意志、想い、願い」を表す言葉です。「御心」と対照的なもの、それは「私たち人間の心」です。「神さまの心」と「私たちの心」は、必ずしも対立するだけでなく、合致することもあります。「天になるごとく 地にもなさせたまえ」。私たちの心が、少しでも神さまの御心に近づいてゆくことを、それを私たち教会は願い続けてきました。私たちの願いが神さまの願いと重ね合わさり、その神さまの願いが私たちの間に実現してゆきますように、と祈るのが主の祈りです。「御心」を祈り求めるにあたって、気をつけたいことは、私たちは「自分の意志・願望」を「神さまの意志」とみなして、正当化してしまう、ということです。私たちは常にそのような過ちを犯し得る可能性をもっています。教会の中で特に気をつけたいことは、それを他者に押し付けてしまうことです。私たちが心に留めておきたいことは、何が「御心」であるのか、私たちには完全には知り得ない、ということです。御心を完全に理解しておられるのは、イエス・キリストお一人です。ただ、少しでも神さまの御心に近づくことができますように、とイエスさまを通して祈り求めることはできるでしょう。

「祈り」ということには、二つの側面があるでしょう。一つは、言葉を尽くして「語る」祈り。二つ目は、口をつぐんで「聴く」祈りです。私たちが言葉を尽くして神さまに祈りをささげた後に、神さまご自身が語られる沈黙の時間が訪れるのだ、ということもできるでしょう。「主の祈り」は、主イエスご自身が教えてくださった祈りです。またそして、主イエスご自身が私たちのために祈ってくださっている祈りでもあります。私たちが祈るより先に、主イエスは祈っていただきます。私たちは主の祈りを祈る度に、主イエスの祈りに加わらせていただいているのだと言えるでしょう。主イエスの祈りは他ならぬ、私たち一人ひとりの心の内にともされています。主の御心は、他ならぬ、私たち一人ひとりの心の内にともされています。誰からも強要されることなく、誰からも奪い取られることなく、私たち一人ひとりの心の内に輝いています。

この主イエスの祈りに私たちの心を開き、この主の祈りに私たちの祈りを合わせてゆくことができますようにと願います。